「こごみちゃんのラブストーリー」(50号を記念して)

京都市ごみ減量推進会議　会長　高月　紘

先日、3R推進全国大会において、ごみ減量推進会議主催で子ども向けに「ハイムーン先生によるまんがワークショップ」を開催しました。このワークショップはテーマを「まんがを描いてごみを減らそう」にして、こども達が自由にごみ減らしのアイディアをまんがで描くものです。今回は、まんがの中にごみ減のキャラクターである「こごみちゃん」や京エコロジーセンターのキャラクターである「ちきゅまる」にも登場してもらうことにしました。参加したこども達は思い思いのまんがを描く中で、1人の女の子が「こごみちゃんとちきゅまるは結婚するねん」という驚くべきストーリーを描いてくれました。そして、言いました「こごみちゃんがごみを減らすと、ちきゅまるが喜ぶの」。実は、こごみちゃんもちきゅまるも私が創作したキャラクターですが、まさか2人が結婚するとは作者も想定外のストーリーでびっくりしました。

しかし、女の子が言うとおり、ごみを減らすことが地球への環境負荷を減らすことになる訳で、ここに私たちごみ減量推進会議の活動のねらいがあります。さらに言えば、最近ごみ減の活動は、京エコロジーセンター*や京のアジェンダ21フォーラム*との共同事業を行うことにより、幅が拡がり、充実したものになりつつあります。まさにごみ減の重要なコンセプトであるパートナーシップ事業が進むことになります。その意味で、「こごみちゃん」は1人でがんばるのではなくて、色々な人々との絆の中で活動する必要があります。願わくはこの「ラブストーリー」がうまく進みますように!

*京エコロジーセンター、京のアジェンダ21フォーラム:いずれも、ごみ減事務局のある京エコロジーセンター内にある事業所で、環境に関する活動を行っている。

秋のイベント報告「未来フェスタ京都 科学×エコ」「3R推進全国大会 in Kyoto」

10月10日(月・祝)に、京エコロジーセンター、京のアジェンダ21フォーラム、そして青少年科学センターと共同で、「未来フェスタ京都　科学×エコ」を開催しました。それぞれの活動を紹介するとともに、来場者に楽しく参加してもらえるワークショップを企画するなか、当会議では、漫画家のハイムーン先生(=当会議　高月会長)によるこどもワークショップ『まんがを描いてごみをへらそう!』と有限会社ナチュラルエナジーさんのご協力で『～第1回 ものづくり小学校～ 自転車とつきあうってこんなに楽しい!!』を開催しました。

まんがワークショップに参加した子どもたち

は、ファシリテーターと一緒にごみを減らすための工夫や、日々実践していることなどをグループで話し合ったあと、そのアイデアをまんがに描き発表しました。みんな緊張しながらも、自分の考えたことをがんばって発表してくれました。

『自転車とつきあうってこんなに楽しい!』では、ナチュラルエナジー代表の長田達也さんより、トライアスロンとの出会いや、競技についてのお話、またメカニック(競技用自転車のメンテナンス)を担当されている山中功さんからは、自転車との上手な付き合い方をたっぷりと教えていただきました。これからは、愛着を持って大切に乗ることを意識してもらえそうです。

10月28日(金)～30日(日)に京都市勧業館みやこめっせにて開催された「3R推進全国大会 in Kyoto」では、ブース出展をはじめ、地域ごみ減の存在をアピールする展示など様々な取組を展開しました。10日のイベントに引き続き『まんがを描いてごみを減らそう』や、『～第2回 ものづくり小学校～ 有次さんと親子で楽しむ!手作りスプーン教室』のワークショップを開催。一生ものの庖丁作りで有名な有次の代表、寺久保進一朗さんからスプーン作りを教わりました。銅板からつくる世界にたった一つだけのスプーンに、参加された親子が真剣に、そして丁寧に向き合う姿に、会場を訪れた皆さんから温かい拍手が送られました。今も京都に息づく"物を大切にする心"をしっかりと伝える、意義ある取組となりました。

その他、当会議の2R事業である「もっぺん」の登録事業者さんにご協力いただいた『もっぺん出張所』や、おもちゃの交換会『かえっこバザール』を開催。会員の皆さんにもブース出展やシンポジウム,ワークショップを開催いただくなど、たくさんの来場者の皆さんに、いろいろな面からアピールできたイベントでした。

取材:松村 香代子

事務局より

今年の秋は「未来フェスタ京都　科学×エコ」「3R推進全国大会　in Kyoto」と大きなイベントが2つあり、事務局も大忙しでした。でもどちらのイベントも予想を上回る多くの方に来ていただき、京都市ごみ減量推進会議の活動も、また少し広まったのではないかなと思います。そして、3R推進全国大会の会場ではこ～んな(笑)Tシャツを着ていました。いろんな方法で皆さんに存在を知っていただき、ごみを減らす取組を意識していただけるよう、ますます頑張っていきます。目指せ!ごみ減量　39万t へ!

ライター募集中!

環境に関心があって
取材&原稿執筆に興味がある方
事務局までご連絡ください。

京都市ごみ減量推進会議会報誌　こごみ日和　No.50

〒612-0031　京都市伏見区深草池ノ内町13
京エコロジーセンター活動支援室内
TEL:075-647-3444／FAX:075-641-2971
E-mail : gomigen@mbox.kyoto-inet.or.jp
URL:http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gomigen/index.html

ゴミゲン・ネット　検索　で検索出来ます

入会のご案内

京都市ごみ減量推進会議は、京都市のごみを減らし、環境を大切にしたまちと暮らしの実現に寄与することを目的として、市民団体、事業者、行政により1996年11月に設立した団体です。パートナーシップで多彩な活動を展開中。京都市ごみ減量推進会議では、ともに活動する会員を募っています。
詳細は、事務局へ問い合わせください。TEL:075-647-3444

企画編集:京都市ごみ減量推進会議　普及啓発実行委員会
(会報誌ホームページ小委員会)

古紙を含む再生紙に大豆インクで印刷しています　PRINTED WITH SOY INK

京都市ごみ減量推進会議・会報誌創刊50号記念

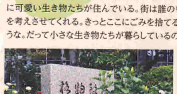
こごみ日和

※人は、ものを大切にする心を失うと、知恵や工夫という技術を失い、ものを平気で捨てるようになります。
だから、大切だったもの、こと、環境は何だったのだろうとふりかえることが、今、とても「大切」です。
そこで、京都市ごみ減量推進会議会報誌創刊50号記念では「大切」を考えることにしました。

地図を書かない地図帳
京都たいせつマップ

地域へ

旧小学校の正門前。色とりどりの草花、丁寧に手づくりされた催しへの呼びかけが何とも微笑ましい。よくよく見ると草花の中に可愛い生き物たちが住んでいる。街は誰のものなのか。そこを考えさせてくれる。きっとここにごみを捨てる人はいないだろうな。だって小さな生き物たちが暮らしているのだから。

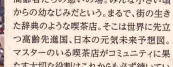


地域・集い・食

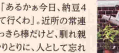
92歳だという常連のお客さんが話してくれた。「昔は、この先の角が人力車のとまり場だったんだよ。みんなそれに乗って仕事を済ませに行ったものさ。」明治時代に建てられた建物を改築した喫茶店は、意外にも高齢者たちの憩いの場。みんな小さい頃からの幼なじみだという。まるで、街の生き辞典のような喫茶店が、そこは世界に先立つ高齢先進国、日本の元気未来予想図。マスターのいる喫茶店がコミュニティに果たす大切な役割はこれからも必ず続いていく。玄関先に復元されたガス灯を見ながら思った。「その灯を消してはいけない。」

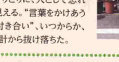
商い（お店屋さん）

暮らしに溶け込んだお豆腐屋さんの店先。行商に使うリアカーはとてもシンプルで、使い込まれた道具の美しさが滋れる。「あるかぁ今日、納豆4ヤ!」「おおきに、後で持って行くわ」。近所の常連さんからの注文は少しぶっきら棒だけど、顔れ親しんだ者同士の言葉のやりとりに、人として忘れてはならないものがほの見える。"言葉をかけあう街づくり""垣根ごしのおけさ合い"、いつからか、そんな大切な事が街の設計から抜け落ちた。

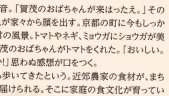


ゴトゴトとリアカーの音。「賞茂のおばちゃんが来たったえ。」その呼びかけに近所の人が家々から顔を出す。京都の町に今もしっかりと根づいている日常の風景。トマトやネギ、ミョウガにショウガが美しく広がっている。賞茂のおばちゃんがトマトをくれた。「おいしい。これフルーツと違うか!」思わぬ感想が口をつく。おばちゃん、賞茂から歩いてきたという。近郊農家の食材が、まちなかの家々の食卓に届けられる。そこに家庭の食文化が育っていく。その味が子に伝えられる。こうして日々おいしいのちがつくられていく。消費生活が中心となって、そこが変わった。





市内で見かけるばったり床机。この床机を広げて品物を並べれば、あっという間に道端にお店ができあがる。夏の夜には、夕涼みの腰かけとしても大活躍。内と外、個人と地域を結ぶ、暮らしの知恵が詰まった素敵な場所。そこにあったのは絵側という文化。始末の心、みんなで子を育てること、祭りの支度、商いのアイデア、火の用心。
大切なことはみ～んなみんな絵側で生まれた。21世紀、日本の復興に「えんがわ」の発想がいる。



この街には、21世紀に伝えたいものこと、環境が生きています。
しかし、時代と共に人々がかつて持っていた
『たいせつ』なものごとが見えにくくなっています。
私たちと諸に街歩きを楽しんでください。
これは誰にでもできる「まちづくり手法」なのです。
ゆっくり歩く、つぶさに見つめる。そこが大切。

まちなかのオアシス、京都御苑より

出水の流れは、人を引き付ける不思議な力を持っている。子どもたちは夢中で、この水の冷たさや柔らかさを体で感じる、そこが大切。私たちにも、靴を脱いで遊んだ記憶が鮮やかに蘇る。

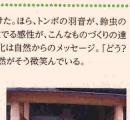
住まい・街づくり

何十年、何百年もの時を経て、尚も変わらずそこに在り続ける建物たち。古いものは、取るに足らないものだろうか。朽ちていくものはいらないものだろうか。なのに何故、それはこんなにも美しく、私たちの心を捉えて離さないのだろう。

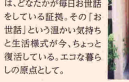
まちなかで、秋の虫たちを見つけた。ほら、トンボの羽音が、鈴虫の鳴き声が聞こえてくる。季節を愛でる感性が、こんなものづくりの達人たちを育ててきた。季節の変化は自然からのメッセージ。「どう？ちょっとオシャレしてみたの。」自然がそう微笑んでいる。

ショーウィンドウの飾り付けをする君に乾杯！今日はどんなメッセージを伝えようか。通りに面したショーウィンドウをデザインするのはあなた。商品をきらびやかに飾るだけではなく、あなたが何を感じ、何を考えているのか、心の中から湧いてくる言葉を添えて、通りを歩く人々に話しかけてみよう。あなたが言葉を添えれば、そしてショーウィンドウが連鎖とつながれば、対話と微笑みの花が咲く。あなたと誰かを繋ぐ道端には、たくさんの可能性が潜んでいる。たっぷりのユーモアと少しの勇気で、みんなの通りを素敵なコミュニケーションの場に変えてみよう。

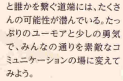
お寺などでよく見かける手水鉢（ちょうずばち）。本来は心身を清めるために用いられるが、防災の観点から も重要な役割を担っているとは言えまいか？地下水から天水まで、いざという時の水の活用を考えてみるのもよい。そして美しい水が、このように街の景観に貢献してくれることを活かせば、水文化と共生する都市という一面をつくることができるのでは？



まちなかでたくさん見かけるお地蔵様。行きかう人々が手を合わせる姿は、何とも言えぬ温もりに満ちた光景である。きれいなお花やお水が供えられているのは、どなたかが毎日お世話をしている証拠。その「お世話」という温かい気持ちと生活様式が今、ちょっと復活している。エコな暮らしの原点として。

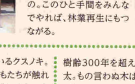


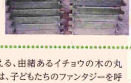
クーラーの室外機やガスメーター、ごみ箱などが美しく収納されている風景づくりは、京の人々のお手のもの。このひと手間をみんなでやれば、林業再生にもつながる。



私たちを包み込むかのように生きているクスノキ。この大きな木に、いったい何人の子どもたちが触れ合ってきたことだろう。木肌を通して伝わる木の生命力。強そうに見えるけれども繊細な命。木を思いやる気持ちがあってはじめて、木との対話が成り立つ。子どもたち、その木は生き物だよ。

樹齢300年を超える、由緒あるイチョウの木の丸太。もの言わぬ木は、子どもたちのファンタジーを呼び起こし、様々な遊びの舞台へと誘う。イチョウは水に強いために傷みにくく、この丸太はもう20年以上もここに在る。木の生命は、切られて終わりなのではなく、木を活かそうとする人の心によって新たな生命を得る。そして、尚生き続ける。

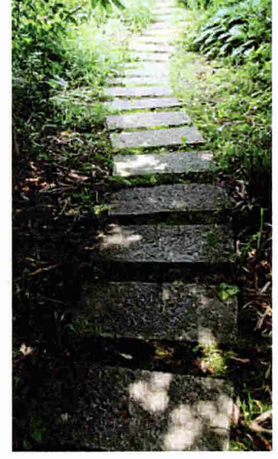




最後のメッセージ

街歩きで見つけたものは"人は賞素に、街は豊かに"という京の町に伝えられてきた生き方でした。戦後の社会で私たちはたくさんの「もの」を手に入れました。「もの」に溢れるとどうしてもたくさんのその「もの」を捨てる行為が発生します。
大切なのは「もの」そのものより、作ってくれた人を思うことや、ものを通した語らい、そして「もの」をお世話し続けるという生きざまなのではないでしょうか。
街を歩きながら、人の思いに目をやることで、何故か充実したひとときが過ごせた気がします。

語る。生きる手応えを探しに



20世紀の忘れ物？

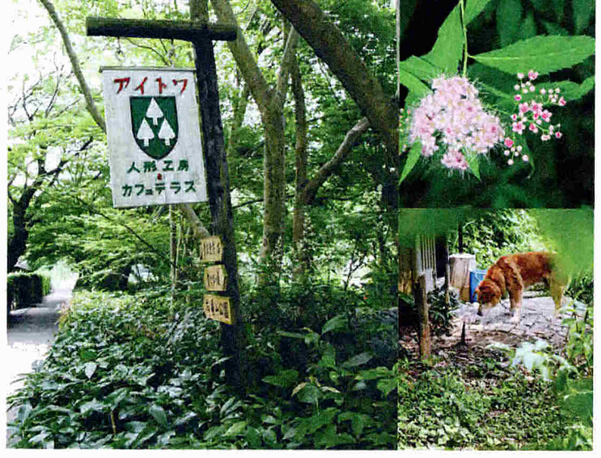
森孝之さん

私たちは今、勤労観というものについて、もう一度考えてみる時に来ています。元来、日本人は高潔な精神を持ち、自らの仕事に対して誇りとやりがい、つまり社会に役立つ物を生み出すことに深い喜びを感じていました。その勤労観が今日の社会の中で大きく変化しました。仕事は知的労働や身体労働などと呼ばれ細分化され、お金を貰うための手段となっていくと同時に、物を生み出す喜びや誇りが戦後社会の中でどんどん失われていったのです。特に、農業への軽視は私たちの生活の中の大切な物を見失う結果となりました。私は、20世紀の最大の忘れ物は、この高潔さや勤労観だと思っています。

暮らしの営みをじっと見つめて

今関信子さん

昔は、物が余りなかったので、母は何でも手づくりをしていました。当時、洋裁など習う余裕もなかった母は、私に洋服を作ってくれる時も、身体に直接布をあてて、立体裁断をしたものでした。私たちは、そんな母の姿を見て、自然に生活に必要な智恵や工夫を学んできました。必死に生活を営んでいく、そんな時代でした。私は、子どもは〝目習い、手習い、耳習い〟すると思っています。今は、見習いや手習いの大切さが忘れられている。自分の子どもの教育までも他人に頼る社会です。これは家庭教育の力が失われていることを物語っています。



創ることは生きる証です

森小夜子さん

私は、小さい頃は電気も通っていない奈良の山奥で育ち、生活に必要な物は全て父の手づくりでした。ですので、小倉山のこの家（現在のアイトワ）に来た時も、寂しいとも怖いとも思わず、すうっとここの生活に溶け込めました。私は人形を作っていますが、人形に限らず、何かを作ることが一番私らしい生き方だと思っています。例えば、畑で野菜や果物を育て、季節の食材で様々に工夫した料理を作り、衣食住の全てに手を掛けて暮らすこと、創る歓びに満ちた生活、すなわち生活人でありたいと願い続けることが、私にとってかけがえのないことなのです。〝創ることは生きる証〟なのです。

消費社会から、創る歓びを見つける社会へ

森孝之さん

戦後の経済発展は、人々から本来の意味の生活を奪い、代わりに多くの消費者を生み出しました。工業社会の発展に伴い、家庭は物やサービスを消費する場となり、個々人の生活を創造する場ではなくなりました。既製品を買い求めることが幸福だと信じ込み、挙句の果てに大量のごみを排出する生活が当たり前となったのです。近年では壮んに環境保全やエコということが言われますが、現在の生活を維持しながら、リサイクルを行うという発想では根本的な解決にはなりません。欲望の解放をコントロールし、消費一辺倒の社会から個々人が生産する社会へ、人々の生活の中に、創る喜びを取り戻すことが本当の意味でのごみ問題解決へとつながっていくのです。

生活人という発想を

今関信子さん

私たちはアイトワの森さんの言われる状況の中で、何のために生きているのか、そのことを一人ひとりが考え、答えを出さなくてはいけないところまで来ています。

今まで求めてきた「安い」「便利」「簡単」という価値基準をおろして、生活の無駄に気が付き、生活人としての誇りを持ち、人生を生き生きと手づくりする時期が来ているのではないかと私は思っています。

私が小夜子さんの人形に、そして彼女の生き方そのものに感動し、共感し続けているのは、人形作家である以上に、日々の暮らしを丁寧に楽しみ、その中で無限に輝いておられるからです。可能性に満ちた、これからの女性の生き方を見、私自身の課題を小夜子さんの生き方に見たからです。私たち一人ひとりは皆、生活人なんだという自覚を取り戻すこと、暮らしをシンプルに、創意工夫する姿勢が、柔軟な社会を取り戻すためには必要なことだと思います。

子どもたちへのお手本は、まず私たち大人から！

森孝之さん

山形に取材に行った時のことです。地元の高校生たちに〝今のままの生活（現代の便利な社会）を続けたいですか？〟と問いかけました。すると、全員が〝続けたい〟と答えました。私は正直ショックを受けました。でもちょっと考え直して、意地悪な質問を投げかけてみました。〝僕たち大人は、君たちの将来の分までも猛烈な勢いで貴重な資源を使ってきました。きっと怒られると思ったが、しかし、君たちはこのままの生活でいいと答えてくれた。本当に安心した。〟と、このような話をしたのです。すると、子どもたち全員が今度は〝今のままの生活ではダメだ！〟と意見を覆したのです。子どもたちは、大人のやることを敏感に感じ取っています。将来に希望が持てない一つの原因は、我々大人たちが作った社会に危機感を抱いているからではないでしょうか。この10年余り、環境教育の大切さが訴えられてきましたが、今の生活を維持するための内容ならば何の意味もない。私は教育という立場のはしっこにいる者として、そのことをずっと認識していきたい。土をいじる、草木から学ぶ、豊かな発想と生き方を育む方法は幾らでもあるのです。私は、アイトワ塾などを通して、若い世代の方々と大いに議論し、大いに遊び、私が自然から学んできたことを伝えていきたいと思っています。あんな大人になりたい！こう言われるのが夢ですね。

生き方を手づくりする

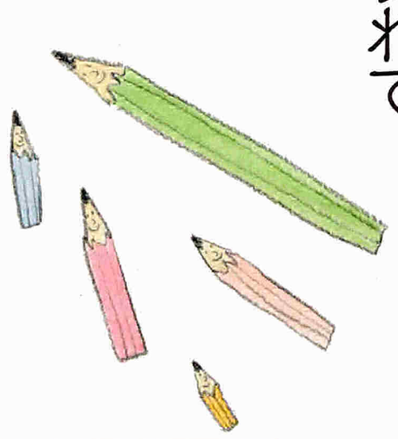
今関信子さん

寝たきりになった父が、危篤状態から生きる力を取り戻し、1年8か月生きた姿をとおして、私に残してくれたものは、〝お前ら贅沢言うな。お前らたくさん持っているだろう。〟というメッセージだったと思います。本当に大切なものは財産なんかじゃない、家族の信頼関係、目には見えない〝愛〟こそが、かけがえのないものなんだ、という父の思いがありました。私たちは多くの物に恵まれ、経済的に豊かにはなりましたが、一方で信頼や愛という、人間が生きていく中で大切なものを失いかけています。人は人としてきちんと向きあう時、本当の生きる力が引き出されます。子どもたちは私たちの望みです。柔らかな頭と心を持ち、キラキラと輝く光です。彼らに、人生の既製品を押しつけることなく、手づくりの歓びを感じられる未来を伝えたい。まずは私たちがそのお手本にならなくっちゃ！

降り積もる時の香りに魅せられて

森小夜子さん

使い込まれた古い布を手にした時、私はかつての持ち主のことをあれこれと想像します。継のあたった布や擦りきれた布には、持ち主の生活や癖までもが染みついており、粗末にはできません。そこには時の香りがあるからです。そんな、過去の記憶が染み込んだ布を、人形の衣装として好んで用います。新しい布にはない独特の質感が、人形の魅力を増してくれるのです。あんなボロボロの布が、こんな素敵な衣装に変身したの！と驚かれることがありますが、私にとって古い布は時間と持ち主の生活があってこそ生まれた、何にも代えがたい宝物。古い物だからこそ持っている価値に気が付くと、暮らしの中にも優しさと充実感が甦ってくるように思います。物を創るということは、物に対して優しくあろうとすることではないでしょうか。



イヌイット ～ありのままの輝きを

森小夜子さん

イヌイット族に嫁いだ、ある若い女性がこんなことを語っているのをテレビで知りました。〝都会で生活をしていた頃は、仕事も充実していて何の不満も無かったけれど、このイヌイットの生活は、全てを自分の頭で考え、工夫しながら生活を創っていくの。それが楽しくて楽しくて仕方がないの〟と。産まれたばかりの元気な赤ん坊を抱きながら、輝いた眼差しで語りかける女性の姿には、生命力が溢れていました。この生きる歓びを感じる心が何よりいのちを輝かすことを、その女性から教えて頂きました。私が感じていること、私が見つけたことを、後の世代にも残したい。こんなことを考える中で、今とっても楽しみにしていることがあります。子どもを育ててみたいのです。できれば、創ることに目覚めた頃のホントに小さな子どもたちにたくさん出会ってみたい。そして人形を創ることなのか、食べ物を育てることなのか、とにかく創る歓びについて時間をかけて教えてあげたい。日々の生活の中で見つけたかけがえのないものを、日々繰り返されるいのちとの出会いと発見を、語り継ぐ役目に挑戦したいと考えています。それが済むまでは、私の人生は終われないと。

～最後に今関信子さんが話してくださいました～

京都には、これからの私たちの生活に必要なものがいっぱい詰まってる。

「しまつする」という言葉「小さくしまって大きく使う」という方法など、私は教えられているわ。

もちろん、昔は良かったと言うだけではつまらない。

そこは、若い人の感性を借りるの。そして、あらゆる世代が一緒になって、その眠っている大切なものをいっぱいひきだすの。心と技と智恵をもっと使って。

そうすれば新しい社会は必ずやってくる。どう？ワクワクすると思わない？

■森 孝之さん

ライフスタイルコンサルタント、アイトワ主宰。50年以上に渡り、京都の小倉山山麓の自宅の庭を開墾、半自給的でエコロジカルなくらしを一貫して続ける。商社勤務などを経て、1986年からは妻の小夜子さんと共に「アイトワ」と命名した循環型生活空間を一般に開放。2000年、大垣女子短期大学学長に就任。近著に『京都嵐山　エコトピアだより』（小学館）など、著書多数。

■今関 信子さん

児童文学作家。滋賀県守山市在住。児童文学とともに、広く子供の遊び、文化、生活に関心をもちながら活動している。日本児童文学者協会会員、子どもの文化研究所所員。近著に『命をつなぐ250キロメートル』（童心社）など、著書多数。

■森 小夜子さん

創作人形作家。アイトワにて、人形教室、人形展示室、喫茶店の運営にも携わりながら、夫の孝之さんと共に、創ることの歓びに満ちた生活を送る。日本創作人形協会会員。エッセイストクラブ会員。人形作品集『いつか鳥のように　民族の賛歌〈3〉』（マリア書房）には多くの反響が寄せられた。

《座談会制作チーム》
- プロデュース：大橋正明（みんなのヴィジョン創造研究所代表）
- 総合ディレクション：松村香代子（作曲家・ライター）
- フォト：岡部達平（写真家・環境プロデューサー）
- イラスト：横山宇加（イラストレーター）
- 総合監修：京都市ごみ減量推進会議 事務局